平成 29 年度長崎大学がんプロ養成基盤推進プラン在宅・地域医療実習

実習生：森田　道

実習先：ホーム・ホスピス　中尾クリニック

実習期間：2017 年 6 月 21 日～12 月 4 日

ホームホスピス・中尾クリニックでの実習を通して感じたこと

2017 年 6 月から 12 月の間、主に月曜日にホームホスピス中尾クリニックにて在宅訪問実習をさせて頂きました。

私の場合は短期での実習ではなく、長期にわたり、ほぼ同じ曜日に同じ患者さんを訪問させていただくことで、がん患者さんを含め、さまざまな疾患で在宅で過ごされている患者さんならびにご家族の体調の変化、それに伴う心理的な変化、表情の変化等を見せて頂くことができ、大変よい学びとなりました。

初回の午前には永眠されたがん患者さんのお見送りに立ち会う機会がありました。直前にも中尾先生はご訪問されていたとのことで、ご家族は悲しみの中でも故人に持たせて差し上げるもの、着せて差し上げるものを前もってご準備されており、訪問診療を受ける中でご本人、ご家族とも、いかに逝くのかということを考え、相談しながら過ごされていたのだろうということを思うと、在宅でゆっくりと共に時間を過ごすことの大切さを身を持って感じました。

また、反対に、ご主人をなくされたばかりのお宅にも訪問をしておられました。患者さんは、当初は通所サービスの利用どころか、日々の生活もままならず、表情も硬いように感じられましたが、半年経つと、たまに行く私にも笑顔で手を振ってくださるようになり、ときどきデイケアにも行くのよ、と嬉しそうにお話しされていました。家族の死を受容していく過程というものは、医療の現場ではなかなか目にすることができませんが、長期にわたり訪問させていただくことで、これも実際に目にすることができてよかったと感じた場面のひとつです。

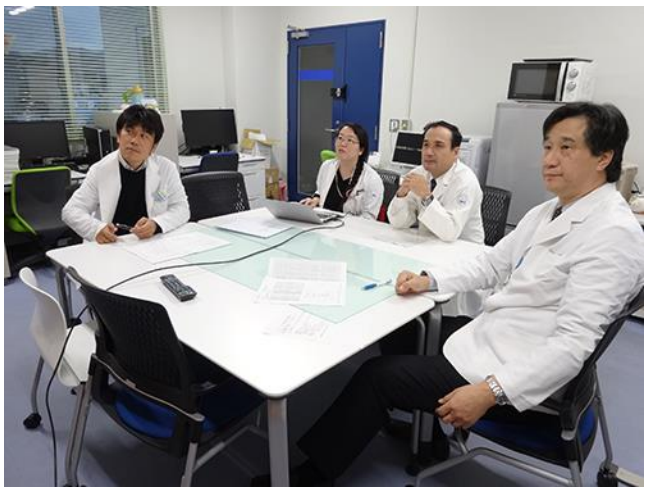
実習を通して最も印象的だったのが、どのご家族、患者さんも「先生がこうやって定期的にきてくれるけん、安心してうちで過ごせるとたい、顔ばみるだけでもよかと」と言われていたことです。もちろん、病院に通院し、さまざまな検査を受けることで安心感を得られる方もおられるのでしょうが、坂の街長崎では体力的にも定期的な通院は負担となる中で、さまざまな医療処置（写真；胃瘻、CV、気管吸引など）が自宅に居ながら受けられるという安心感のみならず、何かあったときにはこの先生に頼めば何とかしてくれるんだ、という精神的な安心感も感じておられることをその言葉から感じました。

実際、どのような状況でも（脳転移で体が思うように動かなくとも）、先生が訪問された際には、家の中に笑顔があふれていました。患者さんご自身も冗談を言ったりと、心理的な負担の軽減にも大きく寄与しているのだと感じました。

いかに逝くのか、いかに見送るのかということは、すなわち、いかに生きるのかということに通じると思います。価値観はそれぞれなので、最後まで高度医療を受けながら病院で逝くがいいのだという方もおられるのは十分承知しますが、医療者側からの提案のひとつとして、在宅で過ごすということのメリットを実際目にして感じることができ、今後の診療に活かしていきたいと感じました。

「自分の力でトイレに行けるうちは家で粘ろうと思って」というのは、最終日に訪問した独居のがん患者さんの言葉です。長年過ごしてきた環境で可能な限りは生活したいという思いは自然なものだと思います。その気持ちを置き去りにした医療とならないよう、早い段階から患者さん、ご家族と相談していける関係を築けるような医療者でありたいと改めて思えるようになったのが、今回の実習の大きな学びでした。

お世話になったホームホスピス中尾クリニックの中尾勘一郎院長先生、黒田看護師さん、その他スタッフのみなさん、本当にありがとうございました。



報告会にて